

鷗外選集

第四卷

鷗外選集 第4巻 (全21巻)

1979年2月22日 第1刷発行 ©
1979年4月16日 第2刷発行

¥ 980

著 者 もり 森 りん 林 た 太 ろう 郎
発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所 株式 岩 波 書 店
 会社
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

灰燼……………	五
かのやうに……………	六七
吃逆……………	一二
藤棚……………	一三
鎚一下……………	一四
興津弥五右衛門の遺書……………	一七
阿部一族……………	一六
佐橋甚五郎……………	二〇
護持院原の敵討……………	二九
大塩平八郎……………	二五

小
說
四

灰

燼

壺

節蔵は久し振に朝早く内を出た。暑い盛の八月の空がゆうべから暴風を催してゐる。半分青くなるかと思へば、忽又灰色に鎖されて、その中を黒み掛かつた雲がちぎれ／＼に飛んでゐる。雑司谷旭出町と葉書に印刷してあつたが、護国寺からどの位の距離があるか分からないので、指ヶ谷の内を出て、三田行から大塚行の電車に乗り換へるのをよして、白山下で車を備つた。

小石川区の片隅を、狭い町から狭い町へと、横に斜に、登つたり降りたりして、車を挽いて行く五十近い男の、日に焼けた項には汗がにじんでゐるが、風があるので、乗つてゐる節蔵は暑くはない。片町から降り

る坂の中途の、自分の住んでゐる小さい家にちつとしてゐるよりは、却て涼しいのである。

節蔵の頭は此時なんにも考へてはゐない。自分がかうして車に乗つて行くのは葬に行くのだと云ふことも考へない位である。町続きの処を通れば、それ／＼の商売をしてゐる店を無意味に見て通る。生垣と煉瓦塀との間の、殆ど人力車をかはすことのむづかしいやうな処を通ることもある。一二週前の大雨に崩れた道の、まだ修繕してない所がある。四辻に交番のある前を通る。仔細らしい顔をした白服の巡查が、節蔵の顔を高慢らしく見たが、節蔵はなんとも思はない。かう云ふ時、気の毒な奴だと思つたのはもう余程前で、馬鹿奴がと思つたのはそれより又ずつと前であつた。そんな反応は節蔵の頭に起らないやうになつてから、もう久しくなる。

曲り曲つて、とう／＼大塚仲町の狭い道から大通り

へ出て、それを横切つて、ちよいとした坂道を護国寺の前へ降りた。新聞で此寺の移転の事を読んだので、どうかなつてゐるかと思つて見たが、これまでと變つた様子はない。手前の方の豊島岡の御墓へ行く道の正門は締まつてゐて、一人の印絆纏を着た男が通用門の内を掃除してゐた。

護国寺から先きは人に道を聞きく行く。低い崖の下の廃屋のやうな建物が紙漉場になつてゐる辺を通る。崖の上には立ち腐れになつて、柱ばかり残つてゐる小家があつて、その周囲の芝生に翻れ種から生えたらしい南瓜が、擅に大ぶ大きな面積に這ひ広がつて、大きい黄いろい花が誇りがに咲いてゐる。

又少し行くと、狭い道の右側に擣屋が一軒あつて、左側の大ぶ広い畑へ、植林の試験でもしたやうに、規則正しい距離間隔を置いて、何の木か知らぬが、苗木を栽ゑ附けた処がある。それがけさの強い風に、皆往

来の方へ靡いて、所々に折れたり倒れたりしたのがあ
る。

それから又人家の軒を並べた所へ出て、少し行くうちに、道傍に墓のあるのに気が附いて見ると、右へ曲がる小道の角に、小さい木札を立てて、本立寺と書いてある。これはけふの葬に来る人のために、わざ／＼立てた栞の札である。旭出町と云ふのは此辺であつたと見える。

そこから曲がつて見ると、疎に立つてゐる杉の木の間、ずつと先きの方まで、長方形の切石を一行に敷いた道がある。葬の為に急に道普請をしたらしく、なま／＼しい木の枝が横に水溜りに倒し掛けてある。

丁度軍隊が演習をする時、砲車や輜重を通すために、工兵が急に直した道のやうに見える。

無理にこんな道を車に乗つて這入らなくても好いと思つて、節蔵は車から降りた。高い杉の木立に掩はれ

て、薄湿りを帯びてゐる道の苔が、葬の前に急いで、乱暴に掃除したために所々斑に剥げて、赤土を露はしてゐる。節蔵が靴で敷石の上を踏んで行くと、車夫は道の平な処は敷石の傍を通り、少しむつかしくなると、車の両輪で敷石を挟むやうにして通つて、跡から附いて来る。

山門近くなると、右手に南無妙法蓮華經と彫つた石柱が立つてゐる。車夫はそこに車を置いて、汗を拭く。節蔵は門を這入りながら、中の様子を見た。中はなか／＼広い。本堂の階段までの間には、一面の苔に掩はれた、広い庭がある。その上を風が新に落ちた木葉を戯のやうにあちこち吹き廻してゐる。本堂は障子が締め切つてある。その右の方の玄関に机を据ゑて、二三人の男が会葬者を待ち受けてゐる。節蔵は玄関先きまで行つて、その男達の顔を見たが、机に向つて据わつてゐる、若い書生らしい男も、背後に立つて何か話し

てゐる、中年の男達も、皆知らない顔ばかりであつた。それでも節蔵は此の人々に声を掛けた。

「まだなか／＼来ますまいなあ。」出棺午前七時と書いてあつたので、節蔵は七時を聞いてから内を出て来た。そしてこゝまで来るには四十分以上は掛かつてゐる。併し葬は原宿から出るのだから、二時間位掛かるだらうと思つてゐるのである。

「さうですね。二時間ではどうかと思つてゐます。」かう答へたのは立つてゐた四十恰好の男である。痘痕か、それとも当前であんなのかと惑はれるやうな、太つた顔をして、紺飛白の単物に紹の羽織を着て、懷中をふくらませてゐる男である。

「なる程。随分果から果ですからね。」節蔵は愛相好くかう云つて、時計を出して見た。

「わたくし共は四時に起きて出ました。」紺飛白の男はかう云つて玄関を降りて、ぶら／＼山門の方へ出

て行つた。

節蔵は玄関から檐下に沿うて、本堂の正面に来て、階段に登つて縁側に腰を掛けた。

今腰を掛けてゐる処から右の方、玄関のあるのと反対の方角は墓地になつてゐて、いろ／＼な形の石塔が並んでゐる。その間々はかなめ垣で為切つてあつて、卒塔婆の古いのと新しいのとは交つて、あちこちに立つてゐる。

苔の附いた庭の上では、矢張風が木葉を弄んでゐる。それが沢山の葉ではない。吹きちぎられた梧桐の葉や榊の葉の十枚か二十枚かが、広い庭の上をあちこちと吹きまくられて、がさ／＼鳴つて奔つてゐるのである。

まだなか／＼会葬者が来さうな模様はないので節蔵は書生の持つやうな毛繻子の袋から、一折の紙に書き掛けてある物を取り出して、万年筆で何か書き出した。一行書いては膝の上に肘を衝いて庭に舞つてゐる木葉

を見る。暫くすると、又一行書く。かう云ふ風にぽつ／＼書き続けてゐる。

暫くかうしてゐるうちに、本堂の背後の方から、腹掛の上に絆纏をはおつた、十ばかりの男の子がちよろ／＼と出て来て、初は遠く離れて節蔵の様子を見てゐて、次第に少しづゝ近寄つて来た。そのうち雨滴落に植ゑてある麦門冬の中から実生の桑の一株が二三本のしなやかな枝を差し伸べてゐる処へ来た。そしてその葉に蟬蛻せみだの止まつてゐるのを見附けて、手をそつと伸ばして掴まへようとした。蟬蛻は庭の苔の上に飛び降りた。男の子は拔足をして再び覗ひ寄つた。蟬蛻は又飛んだ。一飛に一間位飛ぶので、子供が二三度掴まへようとして逃がしてしまふうちに、蟬蛻は墓の間へ逃げ込んで、見えなくなつた。蟬蛻が逃げてしまふと、子供は又節蔵の方へ寄つて来た。少しづゝ近寄つて様子を見て、そろ／＼足を運んでゐる。とう／＼節蔵の

腰を掛けてゐる傍まで来て、物珍らしげに節蔵の身のまはりを見はじめた。

此子供が丁度 Faust に近寄つて来る狗が、初め大きい圈をかいて廻り、段々小さい圈をかいて逼つて来るやうに、とう／＼袖に触れるまでになるのを節蔵は知つてゐて構はずにゐた。その態度が子供の振舞を見てゐたと云ふよりは、子供の振舞が目映ずるに任せてゐたと云ふやうであつた。

子供は近所の貧しい家の子であるか、寺男か何かの子であるか、着てゐる絆纏も腹掛も幾年か前に土地の祭礼の時にも拵へて遣つたものであらう、紺の色が悉く褪めて陸軍の囚徒の着る着物のやうな薄藍色になつて、それがところどころよごれてゐる。腰から下は素肌で、日に焼けて真つ黒になつてゐる。顔はどろんとした目附めつきをして、口を大きく開いてゐる。

子供は暫く節蔵の身のまはりを眺めてゐたが、とう

／＼何かに障つて見なくなつたと見えて、節蔵が脱いで板縁の上に置いたパナマ帽に手を掛けた。素よりどうもする積りではない。只いぢつて見ようとしたに過ぎない。

その時節蔵は万年筆の手を停めて、子供の方へ正面に向いて只一目子供の顔を見た。併し此時の節蔵の顔は余程恐ろしかつたものと見えて、子供は行きなり差し伸べた手を引つ込めて、二三步跡へ下がつた。そして不思議な物でも見たやうな、あつけに取られたやうな顔をして、もう子供に構はずに、物を書いてゐる節蔵の横顔を暫く見てゐたが、しまひには墓場の所に、こなひだの暴風に倒れた杉の木が引き切つて置いてゐるのに腰を掛けて、何か口の内で言つてゐるかと思ふと、鼻歌を歌ひ出した。

風が矢張庭の木葉を弄んでゐる。その外山門の内はひっそりしてゐて、節蔵の物を書く邪魔になるものが

無い。こんな風で余程の時間が立つた。

その内本堂の背後の方から、白地の湯帷子を着た男の子が又一人出て、黙つてさっきの絆纏の子と並んで杉の幹に腰を掛けた。それと同時に山門の外に人力車が留まつて、会葬者が一人玄関の方へ行つた。

それからは会葬者がぼつ／＼遣つて来る。杉の幹の周囲には子供が集まる。中には子を負うた上さんが交つて来て、話をし合つてゐる。一人の子供が杉の木の上を綱渡をするやうに歩いて、滑り落ちたのを見て、赤子を負つてゐる一人の女が、今一人の女にかう云ふ。「あの通りですよ。為立卸しの着物でも、ぢきに台なしにするのですから、張合がありません。」相手の女が返事をする。「いゝえ。わたしとこのなんぞもおんなじ事ですよ。」その癖今泥を附けた湯帷子は為立卸しらしくはなかつた。

杉の木の切り倒してある上へは、大きい扁柏ひのきの下枝

が掩ひ被さるやうに垂れてゐるのに、一人の子供は手長猿のやうに吊り下がつて、その枝をゆすつてゐる。丁度木のいたゞきを風がゆすると同じやうに。

この杉の切り倒してある辺に集まつて来る子供や子供の親は、hyaenaと云ふ獣のやうに、葬の時の施しに逢はうと思つて来たのだらう。それでも子供に為立卸しの着物を着せると云ふ、夢のやうな話をしたがるのである。

会葬者は次第に多く来出した。二三人山門を一しよに這入るやうになる。次いで引切りなく来るやうになる。遠方から出た葬の為めでもあらうか、大抵男ばかりで、極稀にお婆あさんが交つて来る位のものである。会葬者の大部分は玄関から上がる。下足番が木札を渡して、靴や下駄を預かる。書生のやうな男が玄関に通らずに、庭をぶら附いて墓地に這入つて、誰やらの墓の前に据ゑてある石の手水鉢に腰を掛けるのもある。

併し本堂の正面の縁側は、節蔵が早く占有してゐたので、誰も敢て来て争はない。それでも寺内が次第に騒がしくなつて来て、物を書くことも出来なくなつたと見えて、節蔵は紙を袋の中にしまつて、山門から玄関へ歩いて来る人の様子を無意味に眺めてゐる。

もう九時半を過ぎた頃であつた。節蔵が腰を掛けてゐる縁側の背後の障子が開いて僧が一人出て来て、玄関に寄つた方の縁側の隅に吊つてある鐘の下に立つて柱から撞木を脱して手に持つた。節蔵が振り返つて本堂を見ると、向つて右が会葬者席になつてゐて、そこにはもう人が一ぱい這入つてゐた。その並んでゐる人の顔をざつと見渡したが、縁側から見えるあたりには、知つた顔の人はなささうだつた。

節蔵の頭にはこんな事が浮かんた。己がけふ葬られる谷田の爺いさんの内を出てから、もう八九年になる。あれから爺いさんは官吏を罷めて実業家になつたが、

大した失敗もせぬ代りに格別成功した事もないらしい。その間あの一家は己と全く没交渉な生活をしてゐたのだから、けふの葬に立つ人に知つた顔のないのも無理はない。まあ、こんな事である。

併しざつと集まつてゐる人を見渡して、眼を転じようとした時、須弥壇の前の中通りの、僧侶の爲めに明けてある処に面して据わつてゐる、第一列の会葬者の一人がなんだか見覚えのある顔らしく思はれた。そこでさう思つて、又振り返つて見直したら、黄ばんで皺の寄つた、五十余りの男の顔に、なんの知人らしい処もなかつた。

節蔵は馬鹿らしく思つて、目をそらした。その瞬間に皺の寄つた顔の持主は、袴を引き摩るやうに穿いた、背の低い身を起して、こちらへ歩いて来た。その起ち上がった顔を見て、節蔵は直ぐに又さつきの昔馴染らしい感じがして来て、こん度は「あ、牧山だつた」と

思つた。その時になつて分かつたが、前に知人らしく思つたのは、隣席の人と話してゐて笑つた表情が記憶に残つてゐる表情であつたので、それが笑ひ歇むと同時に牧山は四十代の時知つてゐた節蔵にはもう認識の出来ない程、老いて改まつた仮面に戻つたのであつた。

牧山は笑顔をしながら縁側に出て来て、節蔵の傍へ来てしやがんだ。そしてかう云つた。

「山口君暫くでしたね。あなたは相変らずお盛んな様ですが、兎に角大ぶ御様子が變つてゐるものですから、慥かにさうだと分かるまでに、ちよつと手間が取れましたよ。実は葬儀を取り扱つてゐる連中は、皆あなたの事を忘れてしまつた人や、丸で知らない人だものですから、お知らせも洩れる所であつたのを、わたくしが居合せて、是非あなたにお知らせしなくてはならないと注意して遣りましたよ。なに。番地ですか。それはすぐ分かりました。あなたのお書きになつたも

のがいつも出てゐる新聞の編輯局の番号で問ひ合せましたよ。わたくしはもう年が寄つてむつかしい物は読みませんから、新聞に出るあなたの書き物も実は拝見せずにはゐますが、それでもお名前が出てゐる度に、懐かしいやうな気がいたしましたね。」

かう云つて牧山は節蔵の顔を珍らしさうに見直してゐる。節蔵は愛敬笑をした。

「それはどうも御親切に難有うございました。病気はなんでしたか。」

「卒中ですよ。」

「もう幾つになつてゐましたかなあ。」

「わたくしより四つ上でした。丁度五十九です。」

「併しあなたはまだお丈夫ですね。」

「いえ。どういたしまして。もうそろ／＼耄碌し掛けてゐます。」

かう云つて置いて、牧山は起つて自分の元の席へ歸

つて行く。背後から見ると、青み掛かつた薄羽織の裾と、緑色の細かい堅縞の袴の裾とが、殆ど同じ線にある。小男が膝を屈めて歩いてゐるからである。

入違へに最初の玄関で話をした男が外から廻つて来て、階段の下から、もうそろ／＼葬が着きさうだから、本堂へ上がつてくれと云つた。節蔵は帽を取つて被つて、玄関に行つて見ると、もう上がる丈の人が皆上がつた跡なので、がらんと明いてゐて、使ひ余した下足札が十枚ばかり隅の方へ片寄せてあつた。

本堂に這入つて、会葬者席の一番背後に壁を背にして立つてゐると、さつきの太つた男が、前の方が明いてゐますと云つた。なる程須弥壇に近い処に、何か身分のある人らしいのが据わつてゐて、その傍へは誰も遠慮して寄り附かないと見えて、そこが大ぶ広い空席になつてゐた。その外はきつしり人で詰まつてゐる。

節蔵は無遠慮につか／＼とその空席に這入つて行つ

て、手に持つた帽と袋とを傍に置いて、楽に座を占めて、薄暗い本堂の中をあちこち見廻してゐた。

そのうち葬が着いた。廊下に立つてゐた僧の撞く鐘の音と共に、柩は本堂へ舁き入れられた。そして向側の親族席には、谷田家の一族が居流れた。一番上席に据わつた、けふの喪主谷田次郎は節蔵が一度顔を見たことのある男である。併し次郎はその時はまだ野川氏を名告つてゐる文科の学生で、谷田家の人ではなかつた。次郎が年を取つた母親に勧められて、卒業には間があるのに、谷田の婿養子になつても好いと承諾して、けふ媒に連れられて会ひに來ると云ふ日の事であつた。それより二年ばかり前に国から出て、谷田の玄関に置いて貰つて、三田の某学校へ通つてゐた節蔵が、初と云ふ女中に、「お前なんぞは婿さんが見たからうが、僕は見たくはないし、こんな日には余計な人間がゐると邪魔だから、散歩でもして来よう」と云つて、薩摩下